

# メイランド的相対主義からの更なる一步

入不二 基義

## 【Abstract】

In this paper I wish to offer a new perspective on relativism through and beyond examining Meilandian Relativism. Although my argument tends towards defending relativism against certain criticisms, the relativism that can survive the attack of non-relativism turns out to be radically different from what is generally implied by the term 'relativism.' This radically different relativism is not one which insists on "the relativity of truth for schemes, or systems," but rather one which expresses "the finitude of 'us' (=oneness without any boundary)", that is, "the relativity embedded in the asymmetric triad (relativism — non-relativism — Meiland's unconscious discourse itself)."

My argument proceeds as follows. (I) I begin by specifying an allegedly decisive criticism for the self-refutation of relativism. (II) Then, after giving due attention to Meiland's "On the Paradox of Cognitive Relativism" as a suggested objection to that criticism. (III) I analyze some contentious points of his argument, and highlight the insufficiencies of his description. (IV) Finally, in an attempt to develop his investigation beyond what he intended, I present purified relativism as "the realization of 'our' finitude".

本稿は、メイランド的相対主義の検討を通じて、さらにそれを超えて、相対主義についての「見方の転換」を試みる<sup>(1)</sup>。ある批判から「相対主義」を救う方向に沿って考察を進めることになるが、その結果取り出されるのは、一般に「相対主義」として考えられているものとは異なるものとなる。つまり、相対主義を、枠組みやシステムに対しての真理の相対性を説くものとしてではなく、「限界のない」（「私たち」）の有限性<sup>(2)</sup>を表出するものとして読み換えることが課題となる。その読み換えは、相対主義・非-相対主義・両者を非対称的に対比する場という「三者関係」の分析において提示される。

以下の考察は、次のような順序で進められる。まず、相対主義に対する強力な批判と一般に考えられている、相対主義の「自己論駁性」を指摘する批判を出発点とする (I)。次に、この批判に対する相対主義の側からの応答として、興味深く示唆的な J. W. メイランドの論文「認識の相対主義のパラドクスについて」<sup>(2)</sup>を取り上げる (II)。そして、メイランドの議論の問題点、或いは十分に表現し尽くしていないものを指摘し (III)、そこからさらに、メイランドの意図しなかった水準へと考察を進めることを試みる。その考察において、相対主義は「限界のない」（「私たち」）の有限性の自覚<sup>(3)</sup>として読み換えられる (IV)。

## I. 相対主義の自己論駁性

相対主義という一つの名称があるからといって、相対主義という単一・単体の思想があると考えるのはミスリーディングであり、その名称は、複数の思考・主張の「家族的集合体」を表していると捉えるべきであろう。そして、集合体としての相対主義を、様々な観点から分類し解体し、それぞれを個別に検討することは、必要かつ有益な作業であろう。例えば、認識に関わる相対主義と道徳・倫理に関わる相対主義との対比、或いは、意味論的相対主義・認識論的相対主義・存在論的相対主義・道徳の相対主義という分類、さらに、分野や主題に応じて、歴史相対主義・文化相対主義・言語相対主義・パラダイム相対主義・神学上の相対主義・美の相対主義... などの名称を使用することも可能だろう。また、主張自体の持つ論理的特徴によって、否定的相対主義 (= 懐疑論) と肯定的 (寛容的) 相対主義、強い相対主義と弱い相対主義、さらには多元主義・アナーキズム... という区別を設けることも示唆的であろう<sup>(3)</sup>。

しかしながら、本稿の課題はそのような作業ではない。それらの分類と無関

係ではないにしろ、そのような分類とは別の仕方によって取り出される相対性こそが、テーマだからである。そこで、叙述の出発点として、「自己論駁性」という相対主義の「難点」と一般に考えられている問題点、様々な分類を超えて現れる基本的な問題点を、取り上げることにする<sup>(4)</sup>。

あらかじめ、もう一つの基本方向を述べておこう。相対主義についての議論は、古くはプロタゴラスの時代、或いはここ30年の議論をとってみても、その蓄積は膨大なものであるが、もちろん終結してはいない。ただ、多くの物事においてそうであるように、相対主義の問題においても、「穏健派」「中庸派」と呼べるような議論が、妥当な安定感を伴って、調停者として登場するということがあるだろう<sup>(5)</sup>。相対主義の行きすぎた主張を捨て、その生かせる部分を取り出し、対極にある絶対主義（客観主義・普遍主義等）の短所にも陥らない「中道」を見いだす、という方向である。この方向の議論は、ていねいにかつ大胆に行われた場合には、様々の論点の絡み合いを解きほぐして見せてくれて興味深いものとなるだろう。

しかしながら、これも、本稿の採用する方向ではない。相対主義の「難点」とされる部分を修正するのではなく、むしろ、その徹底化を通して相対主義と非-相対主義の関係を捉え直し、相対主義自体についての見方を転換するという方向をここでは取る。もちろん、この方向は、いわゆる「相対主義」批判ではないが、また「相対主義」という既に確定した主張の擁護でもない。相対主義における「相対性」とはそもそも何なのかという探究が迫るはずの、ある「見方の転換」を描き出すことが、本稿の課題である。

相対主義は、自己論駁的であるという批判は、よく知られたものであるが、それは次のような形にまとめることができるだろう。3（3-1と3-2）は、ディレンマになっている<sup>(6)</sup>。

1. 相対主義者は、非-相対主義者を説得しようとして、次のようなテーゼを主張する。
2. 相対主義のテーゼとは、「すべての主張・見解は、絶対的に真なのではなく、Xにとって相対的に真であるに過ぎない。」(T) というものである<sup>(7)</sup>。
3. Tは、相対主義自身にも適用される（「すべての主張・見解」の中に、相対主義のテーゼ自体も含まれる）か、或いは、相対主義の見解だけは例外であり、Tは相対主義自身には適用されない（「すべての主張・見解」の中に、相対主義のテーゼ自体は含まれない）かのどちらかである。

3-1 相対主義のテーゼが、相対主義自身には適用されない（後者）ならば、T 自体は、相対的に真なのではなく絶対的に真であることになる。故に、相対主義は、否定しようとした「絶対的真理」を認めることになる。

3-2

(a) 相対主義のテーゼが、相対主義自身にも適用されされる（前者）ならば、T 自体も、絶対的に真なのではなく相対的に真であるに過ぎなくなる。T が、 $X_1$ （＝例えば相対主義者）にとって、相対的に真であるに過ぎないならば、not-T（絶対的真理を認めるテーゼ）が、 $X_2$ （＝例えば絶対主義者）にとっては真であることも認めなければならなくなる。故に、相対主義は、否定しようとした「絶対的真理」を認めることになる。

(b) また、「自らも含め、すべての主張・見解は、X にとって相対的に真であるに過ぎない。」という相対主義のテーゼのキーコンセプトは、「...にとって真 (true for ...)」という相対的真理の概念である。しかし、この概念を理解するためには、通常の意味での「...は真」という概念、つまり、非-相対主義的・客観的な真理の概念が前提されなければならず、「...にとって真 (true for ...)」は、客観的な真理の概念の限定或いはヴァリエーションとしてしか理解できない。故に、相対主義は、否定しようとした「客観的・絶対的真理」を前提することになる。

こうして、ディレンマのいずれの角（3-1, 3-2）においても、相対主義は、自らが否定するはずの「絶対的真理」を容認し前提にしなければならないので自己論駁的である。これが、典型的な相対主義批判である<sup>(8)</sup>。

## II. メイランドによる相対主義擁護

さて、3-1 と 3-2 は本当に自己論駁的だろうか？ メイランドは、「認識の相対主義のパラドクスについて」<sup>(9)</sup>において、自己論駁的ではないと答えている。

まず、3-1である。これは、相対主義が自らのテーゼだけを特別扱いにして「例外」としており、「相対主義の主張を除くすべての主張・見解は、絶対的に真なのではなく、X に対して相対的に真であるに過ぎない。」ということである。

もちろんここには、難点がある。例えば、「なぜ相対主義の主張だけが、相対性を免れるのか」を説明しなければならないだろうし、「相対主義の主張が

客観的に真ならば、他の主張も同様に客観的に真であることが可能であろう」と切り返されるかもしれない<sup>(10)</sup>。さらに、相対主義をメタレベルに位置づけることで、その特権性を擁護することはできても、それはむしろ、相対主義の興味深い力を二つのレベルの分離によって、オブジェクトレベルへと閉じこめ限定してしまうことになり、問題をメタレベルに先送りするだけになってしまう。

しかしここで注意すべきなのは、次の点である。この難点は「相対主義は自己論駁的である」という難点なのではなく、「メタレベルの導入によって自己論駁性は避けられても、そのことにより相対主義の威力はむしろ半減すると同時に、メタレベルの絶対性という新たな問題が残されるだけ」という難点だということである。従って、メイランドによれば、3-1は、自己論駁的ではないが、その難点により選択すべきではない「角」なのである。

次に、3-2である。(a)と(b)は共に、相対主義は、自らが否定する「客観的・絶対的真理」を認めざるを得ないという「不整合」を指摘している。ただし、(a)が、テーゼの「自己適用」という反射性に基づく不整合であるの対して、(b)は、「真」という概念の理解に基づく不整合である点が異なる。「認識の相対主義のパラドクスについて」が扱っているのは、(a)のタイプである<sup>(11)</sup>。

3-2(a)に対するメイランドの反論は、「相対主義自体が、相対的に真であるにすぎない」ことは、自己論駁的と批判されるものでは全くなく、むしろ相対主義が取りうる有効な選択肢である、というものである。メイランド自身は、「相対主義は相対的に真であるにすぎないと述べることは、不整合を生み出しはしない」と簡潔に述べるにとどまっており、十分に展開されてはいない。しかし、この選択肢は、メイランドが意図している以上に重要な帰結へと導くと思われる。そこで、相対主義自体の相対性について、本稿自身の観点から以下のように敷衍しておこう。

相対主義のテーゼ自体が相対的なものであることは、なぜ自己論駁的であると一般に考えられているのだろうか？ 3-2(a)によれば、相対主義が「絶対的真理」を容認することになるからである。しかし、相対主義者は本当に「絶対的真理」を「自己論駁的に」容認していることになるのだろうか？ 3-2(a)の相対主義の論理で重要なのは、絶対的真理が容認されるのが、「非相対主義者にとって」だということである。絶対的真理の容認は、あくまでも相対性（...にとって）の作用域内で読まれるべきなのであり、相対主義自体と絶対的真理の容認とが同じ平面上で衝突することにはならないのである。つまり、自己適用され

た「相対性」とは、「絶対性」と対比される限りでの「相対性」ではなく、「絶対性」と「相対性」が共に「相対化」されることに他ならない。3-1が、メタレベルに「絶対性」を認めるのに対して、3-2ではメタレベルに「相対性」を位置づけているととりあえず言ってもいい。従って、相対主義自体が相対的であるとしても、そして、相対性の作用域内で(相対的な)絶対的真理を認めるとしても、それは自己論駁的ではないのである。

もちろん、メタレベル化した「相対性」にまったく問題がないわけではない。「相対性」のメタレベル化は、それを徹底するならば次のようになると思われる。(T)自体も相対的であるならば、(T)自体が相対的であることもまた相対的であり、さらに(T)自体が相対的であることも相対的であることもまた相対的であり....と続く。つまり、メタレベル化した「相対性」は無限後退するだろう。そして、「相対性」が無限後退してしまうならば、当初テーゼとして確定しているように思われた相対主義の主張は、いつまでも確定されないうままになるだろう。

しかし、まず第一に、たとえメタレベル化した「相対性」に問題があるとしても、それは、当初考えられた「自己論駁性」という難点とは異なる。従って、相対主義のテーゼ自体が相対的であることは、自己論駁的であるという理由で退けられることはない。第二に、相対主義の主張がテーゼとして完結しないことは「悪しきこと」ではなく、むしろ逆に、徹底化された「相対性」が、「テーゼの表明」或いは「一つの立場」ではないことが示唆されていると捉えることができるだろう。そして、「相対性」が無限後退するかのようになってしまう原因は、相対主義を自らに対立する一つの立場だと誤解する非-相対主義の側にこそ、あるのかもしれない。つまり、徹底された「相対性」は、メタレベルというあり方自体の不可能性および不可避性を示唆しているのに、それを明示的なメタレベルに位置づけようとするからこそ、無限後退という仮象が生じるのかもしれないのである。

相対主義は自己論駁的ではないにもかかわらず、自己論駁的で不整合であるかのように見えるのはなぜだろうか？ その要因は、3-2のような定式化そのものが、実は、非-相対主義的な前提をあらかじめ採用してしまっているという点にあるだろう。非-相対主義の側は、あらかじめ自らの(客観的・絶対的)真理性を、中立の土台であるかのように前提にしてそれに依拠した上で、「相対主義も非-相対的真理を認めざるを得ない」という議論を構成してみせるのである。これは、「相対主義も非-相対的な真理を前提にせざるを得ないとい

う議論を、非-相対的な真理という前提に基づいて構成する」という一種の「論点先取」である。この「論点先取」を問題視しない非-相対主義者にとってのみ、3-2は自己論駁的に映るのであり、一方、その前提を共有しない相対主義者にとっては自己論駁的ではないのである。

さらに、たとえ相対主義のテーゼは自己論駁的ではないにしても、「相対主義者は、そのテーゼに関して非-相対主義者を説得することはできず、自己無効的である。」という趣旨の批判を、非-相対主義者は続けるだろう。それは、メイランドによれば以下のように細分化される。

4. 非-相対主義者が、相対主義を受け入れる可能性は全くない。
5. 非-相対主義者は、相対主義を受け入れる理由・合理的な根拠を全く持たない。
6. 相対主義者は、相対主義のテーゼを、(特に非-相対主義者に向かって)語る動機を持ち得ない。

それぞれに対して、メイランドは一つ一つ詳細な検討を行っているが、ここでは、次の点だけを取り出しておこう。4.に対しては、非-相対主義者の相対主義への転向(回心)ということがありうるし、5.に対しては、相対主義者が「合理性」を相対主義的に使用することを、非-相対主義者は排除することはできない、とメイランドは答える。つまり、相対主義者が非-相対主義者を「合理的」に或いは別の仕方ですべて説得して、非-相対主義者が相対主義へと転向(回心)してしまう可能性は消去できない。さらに、6.は、「説得」や「議論」以前の「語ること」自体の動機が、相対主義からは失われるだろうと批判するが、それは、「純粋に客観的或いは絶対的なことだけが表明に値する」という非-相対主義的な前提の下での批判にすぎない。非-相対主義者が「客観的・合理的・絶対的」なものにしか表現価値を置いていないという偏狭さが、6.の批判によって逆に炙り出される。

結局、「相対主義は自己論駁的である」「相対主義は自己無効的である」という、非-相対主義者からの批判によって明らかになるのは、実は相対主義の「自己論駁性」「無力性」なのではなく、むしろ、非-相対主義者自身の無意識の論点先取的な「前提」の方なのである。

このような観点から見ると、批判の定式化1.が「相対主義者は、非-相

対主義者を説得しようとして、次のようなテーゼを主張する。」と述べる時、「**「相対主義も非-相対主義的な合理的説得を行っている／いなければならない」**という前提が働いていたことになる。しかし、その前提を相対主義者は共有していないかもしれないし、非-相対主義者とは別の目的のために別の仕方でも、合理性を用いているのかもしれないのである。相対主義の難点と思われたものは、実は、非-相対主義者自身の無意識の「**前提・パースペクティブ**」を映し出す鏡の働きをしていたのである。このように、相対主義の難点と思われたものが非-相対主義的な前提へと反転し、非-相対主義側自身の「**偏見**」として投げ返されるところに、メイランドの議論の特徴がある。すなわち、メイランドによる相対主義の擁護の仕方とは、内在的に見えた相対主義批判も、実は外在的なものに過ぎないことが分かり、相対主義批判は失効することを示すという形を取っている。

### Ⅲ. メイランド的相対主義の問題点

メイランドが提出した議論は、相対主義を「制限付き」にするのではない方向で擁護しようとする、興味深い「相対主義論」である。しかし、それでもまだ自らの潜在的な力を十分表現し尽くしていないように思われる。その議論は、単なる「相対主義擁護論」に留まらない、いわゆる「相対主義」自体を書き換えてしまう力を内包していると考えられるからである<sup>(12)</sup>。その潜在力に形を与える準備として、メイランドの議論の問題点を見ておこう。

まず、メイランドの議論に対しては、次のような批判が容易に予想される。

1. メイランドの擁護する相対主義は、敵対者との接触を回避し、自閉することによって不整合に陥らないようにしている。しかし、相対主義は、絶対的真理や普遍的基準などへの攻撃を起源としており、敵対者への合理的で論争的な攻撃なくしては、そもそも相対主義とはなり得ない。言い換えれば、相対主義は、自らとは異なる別のシステム（他のパースペクティブ）へと関わらなければ、そもそも相対主義として表現され得ない。ところが一方、相対主義が、自閉の殻を破り敵対者を攻撃し始めるならば、否定しようとしたものを認めざるを得なくなる。言い換えれば、自らとは異なる別のシステム（他のパースペクティブ）へと関わるならば、各システム（パースペクティブ）の違いを超えて現れる「客観」「普遍」等を認めざるを得なくなる。いわば、相対主義を



主張しようとする、相対主義が否定するはずの「間システムの (inter-systematic) 普遍的命題」を肯定することになり、その帰結を避けるために他との関係を遮断するならば、相対主義自体をそもそも表現できないことになる。こうして、もう一度ディレンマが舞い戻って来て、メイランド的相対主義も、再び自己論駁的な状況に陥る<sup>(13)</sup>。これは、ビーチのメイランド批判において見ることができる批判である<sup>(14)</sup>。

2. メイランドは、相対主義の議論を「合理的な説得」とは別の目的に向かうものと考えているが、メイランド自身が実際に行っている相対主義擁護は「合理的な説得」になっており、不整合である。

また、たとえ相対主義が「別の見方」を「別の仕方」で呈示しているのだと主張したとしても、「合理的な説得」「共通の理解を目指しての対話」「理性に基づく探求」以外に、どんな議論がありうるだろうか？ 相対主義がその点までも否認し、そのような合理的活動とは別のことをしているのだと言うならば、それはもはや「何らかの主張」や「問題解決への従事」でさえなくなる。

結局、相対主義を「合理性」や「普遍性」等からあまりに遠く切り離してしまうならば、それは主張としてまったく無力なものになってしまうだろうし、逆に、相対主義を合理的な議論によって論証しようとするならば、すでにその行為は、相対主義が否定するはずの「合理性」「普遍性」等に依拠していることになる。こうして、メイランドの相対主義擁護は挫折する。これは、シーゲルのメイランド批判において見ることができる批判である<sup>(15)</sup>。

両方とも、一言でまとめるならば、メイランドの議論もまた自己論駁性や自己無効化を回避できていないと批判している。これらが、メイランドの議論への妥当な批判だと言いたいのではない。むしろ、その種の批判は、メイランドの議論の潜在力を見逃すことから生じている。メイランドの議論は、「相対主義批判を非-相対主義の無意識的な前提へと送り返す場面」「転向 (回心) の可能性の場面」「合理的議論の異なる使用の場面」へと進んでいくが、重要なことは、「非-相対主義が、相対主義とのギャップを抱え込むことで、非-相対主義としての輪郭を顕にする場面」をメイランドの議論が召喚し続けていることである。その点を見逃して、個々の場面或いはその組み合わせの「整合性」のみに焦点を当てているだけでは、メイランドの議論の潜在力は見えてこない。

あらかじめ、この批判に対する私自身の解答を呈示しておくならば、1. に対しては、「メイランド的相対主義をさらに徹底するならば、このようなディ

レンマには陥らない。なぜならば、徹底された相対主義はそもそも、システムの複数性を前提した、その間の関係の問題でもないし、或いは一つのシステムへの自閉という問題でもないからである。」となるだろう。2. に対しては、「メイランド的相対主義をさらに徹底するならば、これもディレンマにはならない。なぜならば、徹底された相対主義は「合理性」や「普遍性」等から完全に無縁になることなく、同時に非-相対主義的な「合理的論証」にも包摂されない別の可能性だからである。」となるだろう。しかし、このような解答を導き出すためには、メイランドの議論が徹底された場合に、「相対主義」そのものがどのように変容するかを見なければならぬ。

メイランドの議論は、非-相対主義者による相対主義批判が失効する場面を指摘することで、非-相対主義者の「無意識」を顕にすることに成功している。しかし、メイランドは、自らの議論自体の「無意識」、すなわちメイランドの叙述自体が果たす特有の機能には無自覚である。さらに、メイランドはまだ、相対主義が一つの立場の「自己表明」であると考えているために、相対主義と非-相対主義との非対称的な関係が持つ射程を捉えきれていない。これらの点で、メイランドの議論は不徹底なのであり、その潜在力を十分に展開しないまま終わっている。例えば、以下のような疑問が、この点に関連する問いである。

1. メイランド自身の叙述とメイランド的相対主義の主張自体との関係はどのようなものなのかは、十分明らかではない。
2. メイランド的相対主義とその対立者＝非-相対主義との関係はどのようなものなのかは、十分明らかではない。
3. メイランド的相対主義の「転向（回心）」「別の見方」とは何がどのように変わることなのかは、十分明らかではない。
4. メイランド的相対主義から、システム（パースペクティブ・概念枠）の「複数性」は導かれるのか。
5. メイランド的相対主義は、非-相対主義と相並ぶ「一つの立場」なのか。

あらかじめ述べておくならば、メイランド的相対主義がさらに徹底されるならば、相対主義は非-相対主義と対立する立場の「自己表明」なのではなく、メイランド自身の叙述という場—「私たち」もまた既にそこに巻き込まれている場—自体の有限性の表出となる。この点を考えるためには、メイランド自身

の叙述と相対主義と非-相対主義との「三者関係」のメカニズムを捉えなくてはならない。従って、以下の考察では、メイランドの意図した議論領域から離れ、その議論が意識していなかった水準へと踏み出し、メイランドの議論自体の「無意識」を分析することになる。

#### IV. 更なる一步

メイランド的相対主義の重要な特徴の一つは、「ポジティブな主張内容を持ち得ない」という点にこそある、と本稿は考える。これに対しては、次のような反論があるだろう。一つは、相対主義は「ポジティブな主張内容を持つ」という反論である。すなわち、相対主義は、「すべての主張・見解は、絶対的に真なのではなく、Xに対して相対的に真であるに過ぎない。」(T) というテーゼを、絶対主義・客観主義・普遍主義等への批判として主張するものだという反論である。もう一つは、相対主義が「ポジティブな主張内容を持ち得ない」とすれば、それは「重要な特徴」であるどころか、相対主義がまったく無力／空虚であるということを示していることになる、という反論である<sup>(16)</sup>。

しかし、以下で述べるように、第一の反論は、相対主義と非-相対主義との関係が決定的に非対称的であることを、第二の反論は、非対称的な相対化が、相並ぶ二者間の比較による関係性の問題ではなく、限界のない—というあり方自体の有限性の問題であることを捉え損なっている。

まず、(T) というテーゼは、一連の議論の出発点での定式化にすぎず、しかも、非-相対主義側からの相対主義論駁という文脈の中での定式化であったことを思い出しておこう<sup>(17)</sup>。さらに、相対主義は、相対化の自己適用を選択して、非-相対主義側からの批判を回避できる。その結果、相対主義の論点は、(T) という主張内容そのものではなく、「(T) 自体が相対的に真である」(T') こと、さらに「(T') 自体も相対的に真であること」という相対化の自己適用自体となる。こうして、相対化の自己適用が徹底されるならば、相対主義のテーゼはどこまでも完結せず、一つの確定した主張内容にはなり得なかった。

メイランドの叙述においてもまた、相対主義は、確定した主張内容を直接的に語るのではなく、非-相対主義からの批判がどこまでも外在的なものに留まることを示すことによってのみ、間接的に示されるだけであった。相対主義は、非-相対主義からの批判をつねに失効させ続けるという形で、つまり非-相対主義の否定形としてのみ登場していたのである。つまり、相対主義は、非-相対

主義のネガという形でのみ浮かび上がる。また、「転向（回心）」「別の仕方」「別の目的」ということが相対主義について言われていたが、その内実は、「非-相対主義から相対主義への転向（回心）」「非-相対主義とは別の仕方・目的」という以上には展開されてはいない。いわば、相対主義は、二重否定的に「相対主義でないものではない」としか表現され得ないのである。結局、非-相対主義からの批判の挫折（＝内在的に見えた批判が外在的な批判へと変質してしまうこと）という二重否定的なプロセスによってのみ、メイランド的相対主義は浮かび上がっていたのである。

相対主義が二重否定的であるということは、言い換えれば、「相対主義が映し出されるのは、相対主義者自身による自己表明においてではない」ということである。(T)という自己表明も、また「(T) 自体が相対的に真である」(T')というメタ自己表明も、それが一つの確定した主張として受け取られてしまう限り、まだ不十分なのである。なぜならば、それらを一つの確定した主張として読み取ってしまうことは、相対化の無限の自己適用をある段階で恣意的にストップすることであり、その停止が既に非-相対主義的な前提の作動だからである。つまり、相対主義が、(T) や (T') などの一つの完結したテーゼの自己表明として受け取られる限り、そのテーゼは非-相対主義的な前提の下で外在的にのみ理解されていることになる。そして、外在的に捉えられる限り、相対主義のテーゼは不整合を含むものであるかのように見えてしまうことになる<sup>(18)</sup>。

メイランドによる「外在的批判の失効」の指摘から読み取れることは、相対主義とは、そのような「確定したテーゼの自己表明」ではないということである。つまり、相対主義が映し出されるのは、非-相対主義的な批判の失効が気づかれる所においてであり、そしてそこでのみなのである。いわば、相対主義の「二重否定性」は、主張の「肯定性」に転化することはないということであり、相対主義とは「非-相対主義の鏡に映らないものとしてのみ現れるもの」なのである。このように、相対主義と非-相対主義との関係が決定的に非対称的であるからこそ、「ポジティブな主張内容を持ち得ないこと」が、メイランド的相対主義の重要な特徴となる。

もちろん、メイランド自身の叙述もまた、相対主義の自己表明として働いているのではない。メイランドの叙述は、上述のような相対主義と非-相対主義との非対称性をまさに産出する場である（メイランド自身は、この点に無自覚

であったが)。

次の三者を区別しておこう<sup>(19)</sup>。

A. 非-相対主義

B. 相対主義

C. AとBとの非対称性を産出する場 [=メイランドの叙述の(無意識的な機能)]

C.はまた、その叙述を理解する「私たち」が巻き込まれる場でもある。このCという非対称性産出の場は、以下のように二重の機能を持つ。

一つには、Cは、AとBを非対称的に対比するための「先行的一致」の場として働く。それは、Cが、ある種の「論理」「合理性」の場である以外にはないということである。つまり、メイランド自身の叙述はあくまで「合理的な議論」である以外にはなく、「私たち」の理解もまた、その種の「論理」「合理性」に則って行われるしかない。なぜならば、その「論理」「合理性」とは、次のような形で先行せざるを得ないものだからである。まず、非-相対主義者は、相対主義の自己論駁性や自己無効化を批判し、相対主義に「合理性」が欠如していることを指摘しようとする。それに対して、相対主義者は、その「合理性」の欠如は、実は非-相対主義自身の「偏見」の投影にすぎないという形で反論する。つまり、相対主義は、非-相対主義からの批判が挫折することを通してのみ、二重否定的に描出される。このように両者を非対称的に対比する場、すなわちCには、その当の「合理性」が既に働いていなければならない。言い換えれば、「合理性」の限界を巡っての議論も、当の「合理性」をあらかじめ前提にし続ける形でしか、構成され得ない。結局Cは、「私たち」がその叙述の理解に巻き込まれている時点で、「先行的一致」の場、すなわち常に既に先立ち続ける「合理性」の場として働いているということである。これは、ルールへの従い方における「一致」の水準が、ルールにおける「一致」の水準に、どこまでも先行し続けるという事態に等しい<sup>(20)</sup>。

第二に、C = 「先行的一致」という場自体に、A/Bの非対称的な相対化が反射する。

AがBを「合理的に」論駁しているように見えてしまうのは、Aの「合理性」があらかじめA自身を論点先取的に前提にしていることに気づかずにいる場合だけであった。このことが、Bにおける「相対化」の自己適用や「転向(回心)」の可能性などを介して示されるという事態こそが、非対称的な相対化に他ならなかった。その際、「相対化」が徹底化されたBは、確定した一つのテーゼや

立場にはなり得なかった。それ故、AとBとの対比とは、二つの相異なる立場や確定したテーゼ同士の間の対立ではないし、非対称的な相対化とは、二者間の比較から生じる関係ではないのである。むしろ、非対称的な相対化は、Bを経由した、AによるA自体の有限性の自覚に他ならない。いわば、相対主義とは、非-相対主義という「意識」についての「無意識」に属する問題なのである。だからこそ、相対主義が映し出されるのは、非-相対主義的な批判の失効が気づかれる所においてであり、そしてそこでのみなのであった。従って、非対称的な相対化は、二者間の比較関係の問題ではなく、「一であること」自体の無意識的な限界の問題として、C＝「先行的一致」という場自体に反射する。

「先行的一致」という場＝あらかじめ先立ち続ける「合理性」には、別の「一致」・別の「合理性」という他の選択肢は併存し得ないのだから<sup>(2)</sup>、Cは、境界線を持たない「一であること」、すなわち限界のない「私たち」でしかあり得ない。従って、Cが他の可能性／他の「私たち」によって「相対化」されることはあり得ない。しかし、「先行的一致」は、それが（「不一致」にさえ先立ち続ける）「一致」として捉えられた時点で、すでにルールにおける「一致」の水準に後退してしまう。すなわち、「先行的一致」は、それとして捉えない限りで「先行的一致」であり、それとして捉える限りでは「先行的一致」ではない。そこで、Cいう場を「先行的一致」として捉えることは、それだけで既にCによるC自体の有限性の自覚となる。換言すれば、限界のない「私たち」は、「先行的一致」の場として捉えられた時点で、あらかじめ一致し続けていることの「偶然性」—「一致」でも「不一致」でもないのではなくて「一致」し続けてしまっている偶然性—を、どうしても消し去ることができないことを、「私たち」は自覚する。こうして、Cという場は、他の選択肢によって限界づけられることはないが、自らの「あり方」自体によって有限なのである。

このように、非対称的な相対化とは、Bを経由した、AによるA自体の有限性の自覚であると同時に、それを叙述するCという場によるC自体の有限性へと反射するのである。従って、相対主義が「ポジティブな主張内容を持たない」ことは、「無力」なのでも「空虚」なのでもない。むしろ、それは、限界のない「一であること」自体の有限性の問題へと純化された徴なのである。

本稿が試みた「更なる一步」とは、メイランドの議論の中から、A（非-相対主義）、B（相対主義）、C（メイランドの叙述＝「私たち」）という非対称的な三者性を明示的に取り出すこと、そしてその可能性をさらに展開すること

であった。その結果、メイランド的相対主義は、あらかじめ一致し続ける「私たち」自身の有限性を示すものとして読み換えられた。逆に言えば、非対称的な三者関係は、相並ぶ別の選択肢を持たない「私たち」自体の有限性を示すための装置として働いているということである。

A. B. C. 三者間の関係をこのように捉えるならば、「転向（回心）」とは、実は、非-相対主義から相対主義への「立場の変更」ではないことになる。そもそも相対主義とは、非-相対主義と対立する「一つの立場」ではない。「転向（回心）」「別の見方」によって生じる変更とは、それ以外ではあり得ない「私たち」というあり方、すなわち、先行し続ける「一致」が、同時にそれ自体の偶然性／有限性を呼び込み続けていることを見て取ることなのである。そして、「別の仕方」「別の目的」なども、別のシステム・パースペクティヴへ移動することをまったく意味していない。それは、（他の選択肢はあり得ない）論理や合理性という場を、その場が成立していること自体の偶然性／有限性を見て取るために使用するという他にない。

そして、「転向（回心）」は、相対主義の捉え方自体の変更でもある。当初、相対主義は、システムや概念枠等に応じた真理の「複数性・相対性」を説く立場であり、絶対主義・普遍主義・客観主義と対立しているかのように見えた。しかしそれは、次のように転換する。相対主義とは実は、複数のシステム・パースペクティヴの併存を説くものではなく、そのような議論を構成する「私たち」という場自体の偶然性／有限性を捉えることである。つまり、相対主義は、枠組みやシステムに対しての真理の相対性を説くのではなく、「私たち」からその成立の偶然性を決して消去できないこと、すなわち「私たち」の有限性を表出するのである。

最後に、Ⅲで提出しておいた問題点を振り返っておくことにしよう。

ビーチに見られたような「一つのシステムへの自閉か、間システムの普遍・客観か」という相対主義批判は、明らかに、システムの複数性と相対主義が切り離せないことを前提にしている。相対主義は、システムの複数性に基づいているのに、「自閉」や「普遍・客観の否定」という点で、その前提に反していると捉えられていたのである。

しかし、これまでに見てきたように、徹底化された相対主義は、むしろ相並ぶ別の選択肢を持たない「私たち」自体の有限性に関わっていた。間システムの普遍や客観は、煮詰められるならば、「先行し続ける一致」として、むしろ

ろ複数性を前提にしない「一性」に帰着するはずである。その「一性」は、相並ぶもの・他者を持たない。つまり、「私たち」という「論理・合理性」の場は、境界線を持たない。そして、徹底された相対主義が示すのは、その境界線のない「私たち」自体が有限であることであった。従って、相対性からは、必ずしも複数性は帰結しないのである。

シーゲルに見られたような「まったくの無力か、合理性への依存か」という相対主義批判は、相対主義と合理性を「対立する二つのもの」として二者択一的に捉えている。

しかし、徹底化された相対主義において重要なのは、「非対称的な三者性」であった。そこでは、相対化が示すのは、境界線のない合理性の外に立つ「別の合理性」ではあり得ず、境界線のない合理性自体の有限性に他ならなかった。従って、相対主義と合理性は、「対立する二つのもの」なのではなく、「非対称的な三者性」を構成する二側面なのである。従って、合理性や普遍性は、「転向（回心）」に必要不可欠なのであって、排除されるのではない。シーゲルの批判は、この点を見逃していたのである。

さらに、メイランドの不十分な点への本稿の解答が、以下のようになることは、すでに明らかであろう。

1. メイランド自身の叙述は、相対主義の自己表明ではない。メイランドの叙述は、むしろ、相対主義と非-相対主義の非対称的な関係を示すための装置である。
2. 非-相対主義と相対主義とは、対立する二つの立場なのではなく、非対称的な相対化を構成する二つの要因である。
3. 「転向（回心）」とは、相対主義の捉え方自体が変わることである。
4. 相対主義は、「限界のない（「私たち」）」に対する見え方の転換であって、そこからシステムやパースペクティブの「複数性」は帰結しない。
5. 相対主義は、非-相対主義と並び対立する「一つの立場」ではなく、「非対称的な三者性」という装置を通しての、「私たち」の有限性の自覚である。

#### 注

(1) 本稿とは別の経路によって、「相対主義」についての見方の転換を試みた論考としては、以下を参照。[入不二、1997]、[Motoyoshi Irifuji, unpublished].

(2) [Meiland, 1980]. この論文の翻訳を、本誌『山口大学哲学研究』第6号、pp.75-



92に掲載した。

(3) 分類・区分については、[Hareé, 1996] [Edward, 1990] [Hollis, 1982] を参照。

(4) 先述の分類と関係させるならば、「真理についての相対主義」「認識の相対主義」「概念枠の相対主義」などが、出発点としてのフィールドとなる。

(5) [Siegel, 1987] [Hareé, 1996].

(6) メイランド自身のディレンマ表現は、次のような簡潔なものである。[Meiland, 1980] p.116

(1) 相対主義のテーゼが自らに適用された場合は、そのテーゼは「相対的」で「主観的」なものに過ぎなくなる。(2) 自らに適用されない場合は、(相対主義者からすると) 絶対的に客観的に真であるものが存在することになる。どちらのディレンマの角も相対主義者にとって受け入れられないと想定される。

また、[Mandelbaum, 1979] を参照。[ed. Krausz, 1982] の Introduction でも簡潔な形でまとめられている。あるいは、相対主義のテーゼの主張における二つのレベル—主張内容と主張行為自体—が、それぞれ「相対性」と「絶対性」という相反するものを意味していることによって、語用論的矛盾に陥っているという形の批判もありえよう。

(7) X には、「個人・概念枠・文化・言語・生の形式・世界観等」が、相対主義の種類に応じて入ることになる。ここでは、この X として何を採用するか、それに応じてどのような問題が生じるかは、問わないことにする。

(8) 「相対主義自体が、相対的に真である」ことを批判する論拠として、その他に、「相対主義が、相対主義者にとってのみ真であるにすぎないならば、他の者たちがその主張に真剣に耳を傾ける必要がなくなる。」というものもあるだろう。これは、自己論駁性の指摘ではなく、相対主義の無力性・無効性の指摘である。しかし、後述するように、この批判も「普遍的に真である主張にしか価値がない」という非-相対主義的前提の下での結論にすぎない。相対主義者は、その前提を共有しないのである。

(9) [Meiland, 1980].

(10) メイランドが、エルンスト・ネーグルの言葉として引用したもの。この文脈では、「客観的」=「絶対的」と考えて差し支えない。「相対性」に対立するものとして、「絶対性」「客観性」「普遍性」などは全く同じことを意味するのではない。[Hareé, 1996]、[入不二, 1997] 参照。しかし、本稿の範囲内ではその区別は必要ないと考える。

(11) メイランドは、フッサールの相対主義批判についての検討において、「真理」についての相対主義の擁護を試みている [Meiland, 1977]。3-2(b)のタイプについては、

そこで考察されており、二項的な真理概念とは独立の三項的な真理概念の呈示が、鍵になっている。メイランドのこのアイデアを展開したものに、[Daverson-Galle, 1994]がある。また「...にとって真」という概念を検討した論文としては、[Swoyer, 1982]が卓抜であり、「弱い意味での相対的真理」は、真理の複数性や翻訳不可能性・コミュニケーション不可能性から切り離されるという主張は、とても重要であると思われる。

(12) さらに、メイランドの相対主義論から「きわめて異なる哲学という概念」（＝哲学の書き換え？）を読み取る者もある。[Wainwright, 1986]のIIを参照。

(13) このディレンマをもっと単純化して表すならば、「相対主義は、非-相対主義に対して、関係を持たなければならないと同時に、関係をもってはならない」あるいは「相対主義は、貫システムのでなければならないと同時に、システム閉塞的でなければならない」ということになる。

(14) [Beach, 1984].

(15) [Siegel, 1987] p.22-23.

(16) この二つの想定反論は、IIIで述べたビーチのメイランド批判とシーゲルのメイランド批判に、大ざっぱにはあるが、対応する。

(17) 正確に言うと、(T)は本稿が議論のために再構成した定式化であって、メイランドのこの論文の中には、相対主義の規定・定義等はあらかじめ与えられてはいないのである。メイランドの議論が単なる「相対主義擁護」ではなく、相対主義自体の見方を変更する力を潜在させているという点から考えると、この「規定・定義のなさ」は積極的な意味を持つと考えられる。

(18) IIで、メタレベル化した「相対化」の無限後退という問題に言及した。それは、(T)自体が相対的であることもまた相対的であり...と無限に続くならば、相対主義はテーゼとしていつまでも完結し得ないという問題であった。しかし、相対主義が、一つのテーゼ・立場の主張でなければならないと考えること自体が、非-相対主義的な「論点先取」であるならば、テーゼとして完結しないことは、必ずしも「悪しきもの」とは言えなくなる。さらに、そもそも「相対性」が無限後退するかのように見えること自体が、相対主義の「二重否定性」を「肯定性」に転化できるかのように錯覚することから生じているのである。つまり、非-相対主義による批判の挫折＝限界であるものを、相対主義のポジティブなテーゼであるかのように捉えてしまう時のみ、そのテーゼは明示的な「無限後退」に巻き込まれるのである。「無限後退」による未完結性とは、限界のない「私たち」が、どこまでも透明なものであると同時に偶然的であるということ、対立する複数の立場・テーゼ・主張の問題として誤解することによって生じてしまう仮象だと思われる。

(19) この三者関係に相似的な例としては、ルイス・キャロル「亀がアキレスに語ったこと」[Carroll, 1895]における「アキレスと亀とルイス・キャロルの叙述」の関係が挙げられる。「アキレス／非-相対主義者」「亀／相対主義者」「ルイス・キャロルの叙述／メイランドの叙述」という相似であり、また、アキレスの「論理」が亀を説得し得ないことは、非-相対主義の「自己論駁性による批判」が相対主義批判となり得ないことに対応する。アキレス-亀-ルイス・キャロルの叙述の「三者関係」について、以下に略述しておく。

アキレスによる亀の説得は、論理的必然性が遅延化され続けるために、いつまでも終わらない。つまり、「前提<sub>1</sub>と前提<sub>2</sub>から、結論を引き出す」アキレスは、「前提<sub>1</sub>と前提<sub>2</sub>から結論が帰結すること自体を前提<sub>3</sub>として追加することを求め、さらに前提<sub>1</sub>と前提<sub>2</sub>と前提<sub>3</sub>から結論が帰結すること自体を前提<sub>4</sub>として追加することを求める…」亀を、いつまでも説得し終わらない。けれども、「私たち」がルイス・キャロルの叙述を通して、そのことを理解する時には、当の「(前提から結論に至る)論理的必然性」は既に使用されてしまっている。そこで、亀による論理的必然性の遅延化は、既に「私たち」が到達してしまっている「目標」の先送りとして理解されざるを得ない。すなわち、亀によって想定される「論理的空白」を常に既に飛び越えてしまっている所からしか、「論理的空白」についてのアキレスと亀の対話を叙述することは始まり得ないのである。ルイス・キャロルの叙述は、「私たち」がその叙述の理解に巻き込まれている時点で、常に既に「先行的一致」の場として働いているということである。

確かに、アキレスによる亀への説得が始まり、それを「私たち」が理解する時点で、ある意味では「問題」はあらかじめ「解決」されている。ルイス・キャロルの叙述と「私たち」による理解が始まる時には、埋められるべき「論理的空白」は常に既に飛び越えられており、「問題」より「解決」が先行し続ける。しかし、注意しなくてはならない。「解決」が「問題」に先行し続けるということと、「問題」が「問題」としてさえ生じていない、或いは「問題」が全く解消する、ということとは決定的に異なるのである。むしろ、「解決」が「問題」に先行し続けるということは、「解決」は最終的に完了することはないということでもある。これはどういうことだろうか？「問題」として叙述された時に、常に既に「解決」が先行しているということは、また同時に、「問題」が発生し続けなければ「解決」は先行することさえないということでもある。故に、「問題」は最終的な「解決」(すなわちアキレスが亀を最終的に説得すること)に至ることはあり得ないし、あり得てはならないのである。結局、アキレスと亀との非対称性とは、「問題」に「解決」が先行し続けるということと、(だからこそ)「問題」を「解決」し終わることは決してないということとの間の関係なのである。そして、アキレスと亀

この非対称性は、ルイス・キャロルの叙述＝「私たち」の理解の場自体へと反射し、「私たち」という場が成立していること自体の危うさを表出する。つまり、「論理的空白」を常に既に飛び越えている「私たち」もまた、「論理的空白」を埋め終わることはあり得ない。むしろ、どこまでも埋め終わらないことによってこそ、「論理的空白」を常に既に飛び越え続けていることになる。こうして、ルイス・キャロルの叙述＝「私たち」の理解の場自体が、「論理的空白」を常に既に飛び越えているのにそれを埋められない。「私たち」という場は「論理的空白」を常に既に飛び越えている点で「限界」を持たないが、「論理的空白」を遂に消し去ることができない点で「有限」なのである。

(20) ルールへの従い方の「一致」の水準とは、他の選択肢が併存し得ない「私たち」と言い換えることができる。「私たち」とは、特定の集団のことであり、普遍的な人間主体のことでない。それは、「私たち」と遠くかけ離れた「彼ら」を想定することの内にも前提にされ続ける「原・一致 (Ur-übereinstimmung)」である。この「私たち」は、どんなに異なる規則に従っていても、規則についてどんなに異なる解釈をしても、規則への従い方で一致せざるを得ないという水準である。そこで、原理的に「私たち」には他の選択肢があり得ない、つまり相並ぶ別の「私たち」はあり得ないのである。これを B. ウィリアムスは、「異なる生の形式も、私たちに対立する別の選択肢なのではなく、私たちにとっての選択肢なのである。 (“The imagined alternatives are not alternatives to us: they are alternatives for us.”) ([Williams, 1981] p.160) と表現している。

この「私たち」というあり方は、ウィトゲンシュタインの「言語ゲームを可能にする判断の一致 ([Wittgenstein, 1971])」や、[Williams, 1981] の「超越論的な私たち」の問題へと接続している。ウィトゲンシュタインによれば、「異なる規則が想定できるためにも、規則の従い方は一致していなければならないような実践の次元」があり、いわば「言語ゲームの外」に出ることはできないのである。[Williams, 1981] は、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の表現を変換して、「私たちの言語の限界は、私たちの世界の限界を意味する」と述べている。ここで注意しなければならないのは、次の点である。1. 「私たちの言語」はある特定の経験的言語でも普遍的な文法規則でもなく、規則を可能にする超越論的实践であること、2. 「限界」は、正当化の尽きる地点で「このようにやる」としか言えない実践において示されること、3. このような超越論的限界は、私たち人間の自然的な事実として課されたものであり、偶然的なものであること。

また、「私たち」というあり方と相対主義の関係についての興味深い考察は、[Lear, 1982] に対する [Bearn, 1985] の批判にみることができる。その焦点は「経験的相対

主義と超越論的相対主義」の問題である。さらに、「私たち」というあり方については、[Lear, 1984]、[Staud, 1984]、[Moore, 1997] も参照。また、[入不二基義、1997] では、「私たち」というあり方を「地平線としての私たち」という仕方で、国境線と地平線とのアナロジーを使って展開した。

(21) 注 (20) の [Williams, 1981] からの引用文を参照。

## 参考文献

- Beach, E. (1984). "The Paradox of Cognitive Relativism Revisited: A Reply to Jack W. Meiland". *Metaphilosophy*, 15 (January), 1-15.
- Bearn, G. (1985). "Relativism as Reductio". *Mind*, 94. 389-408.
- Carroll, L. (1895). "What the Tortoise Said to Achilles". *Mind*, 4, 278-280.
- Daveson-Galle, Peter. (1994). "Neo-Meilandian Truth-Relativism of a Weak Sort". *EJAP (Electric Journal of Analytic Philosophy)* 2:1. (<http://www.phil.indiana.edu/ejap/ejap.html>).
- Edwards, Steve D. (1990). *Relativism, Conceptual Schemes and Categorial Frameworks*. Avebury.
- Hareé, R. & K., Michel (1996). *Varieties of Relativism*. Blackwell.
- Hollis, M and Lukes, S ed. (1982). *Rationality and Relativism*. Blackwell.
- 入不二基義 (1997). 「相対主義の追跡」、『哲学者たちは授業中』ナカニシヤ出版所収、pp.41-104.
- Motoyoshi Irifuji (unpublished) "Radical Relativity in Relativism".
- Krausz, M. & Meiland., Jack W. ed (1982). *Relativism Cognitive and Moral*. University of Notre Dame Press.
- Lear, J. (1982). "Leaving the World Alone". *The Journal of Philosophy*, 79, 382-403.
- Lear, J. (1984). "The Disappearing 'We'". *The Aristotelian Society, Supplementary Volume LVIII*, 219-242.
- Mandelbaum, M. (1979). "Subjective, Objective, and Conceptual Relativism". *The Monist*, 62-4, 403-23.
- Meiland, J. W. (1977). "Concepts of Relative Truth". *The Monist*, 60, 568-582.
- Meiland, J. W. (1980). "On the Paradox of Cognitive Relativism". *Metaphi-*

- osophy, Vol.11 (No.2), 115-126.
- Moore, A. W. (1997). *Points of View*. Oxford University Press.
- Siegel, H. (1987). *Relativism Refuted A Critique of Contemporary Epistemological Relativism*. D. Reidel Publishing Company.
- Straud, B. (1984). "The Allure of Idealism". *The Aristotelian Society, Supplementary Volume LVIII*, 243-258.
- Swoyer, C. (1982). "True For". In M. Krauz & J. W. Meiland (ed.), *Relativism Cognitive and Moral* (pp.84-108). University of Notredame Press.
- Wainwright, W. J. (1986). "Meiland and the Coherence of Cognitive Relativism". *Metaphilosophy* 17 (1, January), 61-69.
- Williams, B. (1981). "Wittgenstein and Idealism". In *Moral luck*, 144-163. Cambridge University Press.
- Wittgenstein, L. (1971) *Philosophische Untersuchungen*. Suhrkamp.

(山口大学教育学部)